

棲池

文 福沢正男  
監修 田中幸博

いま澄池町といっている所には、江戸のむかし「神の棲む池」という意味で「棲池」といわれる池があつた。

当時、北一色村（今の愛知町）は尾張藩の直轄地で、笈瀬川の水を引いて一面の田圃を作っていたが、かんがい設備はなく、水はけの悪い土地だった。

水は多すぎても少なくても困るもので、洪水はいうに及ばず、雨の少ない年には「水争い」などが起きた。

棲池は雨水などを溜めてできた溜池だが、不思議なことに大雨などで洪水が起きた時の水をいくらでも飲み込んだ。そして日照りの時は救いの池となった。そこで誰言うともなく神様が棲んでおられる池と言われるようになったのである。

長良村は棲池や笈瀬川からは少し離れているので、北一色村より水の悩みが深刻だった。長良村の荒川浅衛門は立派な庄屋で、水不足にもかかわらず、いつも村を豊作に導き、その効によつて名字帯刀を許されていた。

ある年、いつにも増してひどい日照りのため水飢饉になり、田植えがほとんど日延べされ、ついに浅衛門は北一色村の庄屋善衛兵に棲池の水をいつもより多く回してもらおうよう頼んだ。

善衛兵も快く水を出したいのだが、今年に限つて棲池の水が異常に少なく、このままあと十日も雨が降らねばこの村の田植えも覚束ない。そこで善衛兵は浅衛門に「雨乞い」を提案した。どっちの村が得をしてももうひとつの村が悲惨な目に合う。そんなことなら共同で村挙げて雨乞いしようというのだ。

浅衛門は雨乞いなど何にもならないことは百も承知だったが、水源を持つ村の庄屋のいうことだけにむげにはできず、結局承知した。

この辺りの雨乞いはいわゆる「人身御供」を必要とし、これを「お供」といった。今回は北一色村の弥一が「お供」に選ばれた。これは名誉というよりは迷惑であつたが、彼は村の若衆頭をつとめており、やむを得なかつた。

弥一は村社の神明社に三日間籠り、ものいみ（精進潔斎）を行なつてから、二村挙げての雨乞いに臨んだ。

「雨乞い」は、まず神明社で神主からお払いを受けた弥一が村人の担ぐ簀に乗り、棲池まで運ばれ、セレモニーのあと「人身御供」として池に投げ込まれる。もちろんこれは形だけで、泥塗れになつた弥一は池からはい上がつてまた神明社に帰り、精進落としをして俗人に帰るのである。悲劇はこのあと起こつた。雨乞いにもかかわらず雨が降らなかつたことから村人はやりきれない気持ちで弥一にぶつつけ、何だといっては彼を中傷した。弥一と彼の両親はいわれのない中傷に身も細る思いで過ごした。

古老にいわせると五十年ぶりかという日照りは、ついに二つの村の水争いを招いた。北一色村の人々は長良村との取り決めに無視して棲池の水を田圃に引こうとした。そんなこともあろうかと夜つづいて池の番をしていた長良村の人々との間に血が流された。事件は領主の知るところとなり、代官が取調べを始めた。このとき下手人として引かれたのが弥一であつた。弥一は自分の罪を認め、この事件のすべての責任を一人で背負つて獄死した。

やがて雨が降り、人々は弥一を本当に神の「お供」として崇めるようになった。それからはこの池が「澄池」と書かれるようになったということだ。

澄池はだんだん枯れていった。それでも後に北一色の豪農安井徳左工門翁が私財を投じて徳左川水路を開鑿するまでは長良北一色両村の貴重な水源・排水池として村人に大切にされた。池がなくなつたのは明治の中頃であろうが、今では池のあつたことを知る人もない。

